

## (6) 魚 類

魚類 001	コイ目 コイ科	岡崎市 絶滅
<b>ヤリタナゴ <i>Tanakia lanceolata</i> (Temminck et Schlegel)</b>		

### 【選定理由】

本種は市内の河川、ため池、農業用水路などに広く分布していたが、主として水質の汚濁により昭和 30 年代末にはわずかのため池を除いてほとんど姿を消してしまった。その後、数箇所のため池に残存していた個体もオオクチバスやブルーギルなどの外来魚の放流や土地開発、ため池改修などで減少し、最後まで残った柱町地内の東楽園の池も昭和 57 年に主としてオオクチバスの増殖により絶滅した。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	準絶滅危惧

### 【形態】

全長 10cm。タナゴ類では大型で体高は低い方に属する。側線は完全、1 対の長い口ひげがある。背びれの条間膜には、鰭条に平行に紡錘形の暗色斑がある。♂の婚姻色は、体側前半が赤紅色に、腹部が黒色になり美しい。吻端の左右には顕著な追星を生ずる。♀の産卵管はタナゴ類では短い方である。岡崎市ではイシガイ、マツカサガイに産卵していたようである。

### 【分布の概要】

岡崎市では平野部の大小河川、丘陵地の外縁のため池、農業用水路に広く分布していた。県内では平野部一帯に分布し、国内では北海道と南九州を除く全国に分布している。日本のほか、朝鮮半島にも分布する。

### 【生息地の環境／生態的特性】

主として平野部の大小河川、水田地帯の中の農業用水路、丘陵地が平地に接する部分のため池などに生息する。♀は産卵管で産卵床となる大型のイシガイ科二枚貝に産卵するため、これらの貝類が生息する場所でしか見られない。産卵期は 7～8 月で、産卵床となる二枚貝はイシガイ、マツカサガイが好まれたようである。本種は他の魚が活動しない厳冬期でも活動するため、冬季のタナゴ釣りの対象となっていた。内臓が苦くて食べられないのでニガブナの俗称をもつ本種であるが、冬季は苦味も川魚特有の臭みも全く消えてすこぶる美味である（寒タナゴ）。四手網で群を一網打尽にすれば楽なのだが、あえてそうせずに練り餌で釣る事が流行した。本種は釣りでもびんどでも捕獲は容易であるが、酸欠に弱いエアープンプなしでは持ち運びも飼育も不可能である。このため、昭和 20 年代には乙川で釣った本種の素晴らしく美しい♂を空き缶で家へ持ち帰る事ができず、誰もが残念がったものである。

### 【過去の生息状況／絶滅の要因】

主として平野部の大小河川、水田地帯の中の農業用水路、丘陵地が平地に接する部分のため池などで、産卵床となるイシガイ、マツカサガイなど大型のイシガイ科二枚貝のいる池に限って生息していた。額田地域では本宿に近い檜山地区のため池を中心に付近の農業用水路にみられたというが、額田の山寄りの地区には生息していなかったようである。市内では矢作川、乙川などの本流にも生息していたが、どちらかというところこれらの川の河川敷のため池状の部分（「わんど」という）や鹿乗川、安藤川、占部川などの水田地帯を流れる浅い泥底の小河川に群でいる事が多かった。

しかし、主として水質の汚濁により減少し、さらに外来魚の放流、土地開発、ため池改修などによって絶滅した。河川からは昭和 30 年代、ため池からは昭和 57 年頃に絶滅したと考えられ、以来今日まで本種は市内のどこからも記録はない。

### 【保全上の留意点】

本種の産卵床であるイシガイ科二枚貝の生息する池が確保できれば、本種を増殖させる事は容易であると思われる。過去に本種を東楽園の池から別の池に移植し、ある程度増殖に成功した事があったが、その池ではオオクチバスやブルーギルが繁殖して増殖は失敗した。

最後まで本種が生息していた柱町地内の東楽園の池では、イシガイ科二枚貝は今日もまだわずかながら生息しているが、成貝ばかりで稚貝は一つも見つかっていない。また、ブルーギルが異常に繁殖し、他には大型のコイとフナばかりでイシガイ科二枚貝の繁殖を助けるヨシノボリが見られない。本種が絶滅する前に人工的に放流されて繁殖していたタイリクバラタナゴも見られなくなった。このため、この池のブルーギルを駆除し、イシガイ科二枚貝を保全・増殖することが望ましいと考えられるが、現在のところ具体的な対策はとられていない。

### 【特記事項】

岡崎市民の中にはタナッパーと呼ばれ親しまれた本種を懐かしむ人が多い。

### 【関連文献】

永井 貞, 1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会.  
川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.  
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版, 462pp. 保育社, 大阪.

(執筆者 永井 貞)

魚類 002	コイ目 コイ科	岡崎市 絶滅
<b>ウシモツゴ</b> <i>Pseudorasbora pumila</i> subsp.		

#### 【選定理由】

本種は昭和 54 年に洞町地内の天上池で小野浩氏によって発見されたが、発見直後にオオクチバスがマニアの手で放流され、昭和 56 年にはほぼ絶滅してしまっただ。その後、池は改修工事によって重機で掘削、コンクリート護岸化され、昭和 58 年に絶滅した。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I A 類
環境省	絶滅危惧 I A 類

#### 【形態】

全長 7cm ほど、側線は不完全、体側を縦走る黒い縦条を欠く。モツゴに比して頭部が大きく扁平で、モツゴより寸づまりの感じがする。産卵期の♂は体色が黒ずみ、吻端に追星を生ずる。体色も褐色に近く、慣れるとモツゴとの区別は容易である。

#### 【分布の概要】

岡崎市では洞町の天上池でカワバタモロコと共に発見されたが、天上池以外では発見されていない。県内では豊田市、西尾市などで確認されたが、西尾市では本来の生息池が開発のために消失した。

国内では濃尾平野に点々と分布している。日本固有種。

#### 【生息地の環境／生態的特性】

本種は丘陵地の山林中の古くからの池に生息していた。アシやクロモなどが生育する比較的浅い部分の多い池である。本種の産卵床となる石や倒木などがあり、落葉による腐葉土も底に堆積、池水も茶褐色になっている事が多かった。産卵期は早く 3 月に始まる。卵は孵化まで♂が保護する。本種を水槽で飼育した場合、泳ぎ方、採餌行動、テリトリー防衛行動など明らかにモツゴと異なる事が観察される。

#### 【過去の生息状況／絶滅の要因】

昭和 54 年に本種が発見された天上池では、外来魚オオクチバスの放流と老朽ため池改修工事によって昭和 58 年には完全に絶滅してしまっただ。昭和 56 年頃、マニアの手でオオクチバスの放流が市内の各所のため池で行われ始めた。天上池は、車で池まで進入でき、水質も良く餌となる小魚もいてルアーフィッシングに適した環境の池であったため、市内でも早い時期にオオクチバスが放流された池となってしまっただ。その後、オオクチバスは爆発的に繁殖し、池の在来種は急速に姿を消してしまっただ。更に、当時市内で実施されていた老朽ため池改修工事によって、天上池は堤防から池の底の栓まで徹底して改造されたため、放流されたオオクチバスも含め、この池の多くの水生生物は絶滅してしまっただ。当時は工事の際に池の生物に対する配慮がなされていなかったため、本種の他、カワバタモロコやドブガイなども絶滅してしまっただ例がみられた。

#### 【保全上の留意点】

本種が生息できる環境を維持保全する事が第一である。本種は水質の汚濁には弱く、カワバタモロコと同じように農薬によって激滅した。本種が残存した池は、水田や果樹園よりも高い位置にあり、それらの影響を受けなかった場所であった。このため、本種の生息する池周辺での農薬散布には注意が必要である。

また、本種が生息できる環境はオオクチバスも好む環境であるため、マニアによる放流も要注意である。ルアーフィッシングが出来ないように糸を張り巡らす例もあるようだが、何よりオオクチバスやブルーギルなどの外来魚を放流させない事である。また、本種はペットショップやインターネット上で売買されることもあると言われているため、密漁にも注意しなくてはならない。

#### 【特記事項】

岡崎市では、現在移植された西尾市産の個体が数箇所のため池で生息・繁殖している。しかし、それらのため池も本種の生息池としての情報がインターネットなどで広がっているという。

岡崎市で本種が発見された後、西尾市と豊田市でも発見された。現在、両市とも本種を天然記念物に指定している。また、碧南海浜水族館、名古屋市東山動植物園では、本種が系統保存されている。

なお、本種は愛知県の「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」に基づく「指定希少野生動植物種」に指定されており、許可なしで捕獲することは禁止されている（違反した場合は罰則が科せられる）。

#### 【関連文献】

永井 貞, 1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会.  
川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.

(執筆者 永井 貞)

魚類 003	コイ目 コイ科	岡崎市 絶滅危惧 I B類
<b>カワバタモロコ <i>Hemigrammocyppris rasborella</i> Fowler</b>		

### 【選定理由】

本種は岡崎市の丘陵地が平野に接するあたりから平野部の川、ため池、農業用水など至る所に群をなして生息していた。しかし、昭和 30 年代に急速に減り始め、現在では限られたため池に残るのみとなった。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 II 類
環境省	絶滅危惧 I B 類

### 【形態】

体長 4~5cm 以下の個体がほとんどである（稀に体長 7~8cm の個体を目撃することがある）。背鰭 3 棘 6~7 軟条、尾鰭 3 棘 7~8 軟条、胸鰭 1 棘 11 軟条、腹鰭 1 棘 6 軟条、側線は不完全、背面は淡青緑色で腹面は銀白色、背中線と体側中央に暗色の縦条がある。口ひげはない。♂より♀の方が大きい。♂の婚姻色は顕著で美しい金色をしていて光沢を放つ。

### 【分布の概要】

岡崎市では某町地内のため池に残存するのみである。豊橋市、豊川市など東三河ではほぼ絶滅し、西三河では岡崎市の他に自然状態で本種が生息しているのは豊田市だけと考えられる。

国内では静岡県以西の本州、四国の瀬戸内海側と九州北西部に不連続、局所的に分布する。日本固有種。

### 【生息地の環境／生態的特性】

浅い流れのゆるい水草の繁茂する小川や農業用水路、ヒツジグサやジュンサイ、タヌキモのある浅い場所の多いため池などに群で生息する。雑食性でミミズ、ウジ、練り餌などでよく釣れる。びんどもによく入る。澄んだ水よりも落ち葉などの堆積物で茶色に濁った水質の池に好んで生息する。本種の生息するため池に連なる水田にも出てメダカなどと混生する。産卵期は岡崎市では 6 月の下旬から 7 月上旬である。

産卵期の♂の婚姻色は金色で誠に強烈な美しさで、三河地方ではキンモロコ、キンパ、キンパコという名で広く人々に知られていた（カワバタモロコという和名は全く知られていなかった）。また、美しい金色の婚姻色も本種を水から出した時のみ見られ、水槽などに入れると見られなくなってしまふ。本種はエアープンプなしで持ち運びや水槽飼育ができるが、水質の変化には敏感で水道水のカルキなどにも弱く死んでしまふ。野生状態では本種とウシモツゴが混生しているため池の例は多いが、モツゴやタモロコと混生している例は少ないようである。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

昭和 30 年代に絶滅してしまったと思われた本種であったが、昭和 55 年に岡崎史市編纂のための調査で市内の 3 箇所のため池に残存しているのが発見された。しかし、2 箇所はオオクチバスやブルーギルの放流とため池改修工事で絶滅、残る 1 箇所も最近、工業団地造成で消滅する事になり、他の池に移植された。現在移植された本種が某町地内のため池に生息している。しかし、放流後、年々、個体数は減少傾向にあり、小型の個体がほとんどである。

### 【保全上の留意点】

岡崎市にはため池が多く、本種の生息に適した池も多いが、ほとんどの池に外来魚であるオオクチバスやブルーギルが放流されている。これらを駆除し、本種が生息可能な池を確保することが必要である。個人が所有する 100 m<sup>2</sup>以下の池でも本種は十分繁殖可能であるので、これらの活用が望まれる。本種は観賞魚としても人気があるため、心ない捕獲から守ることも必要である。

### 【特記事項】

本種は豊田市、西尾市で市の天然記念物に指定されている。また、碧南海浜水族館では、本種が系統保存されている。

現在岡崎市で生息している本種は、岡崎市産の個体は 1 箇所のみで生息しており、他の数箇所の自然の池で繁殖しているものはすべて西尾市産のものであると考えられる。

### 【関連文献】

永井 貞, 1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会.  
川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.  
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版, 462pp. 保育社, 大阪.

(執筆者 永井 貞)

魚類 004	ナマズ目 ギギ科	岡崎市 絶滅危惧 I B 類
<b>ネコギギ <i>Tachysurus ichikawai</i> (Okada et Kubota)</b>		

### 【選定理由】

本種は昭和 32 年 (1957 年) ギギモドキとして新種発表された魚である。当時、岡崎市内では秦梨地区、山中、本宿地区 (当時は額田郡だった) の乙川支流に生息していて個体数も多く捕獲も容易であった。しかし昭和 30 年代半ばから生じた水質汚濁とともに、これらの地区から急速に姿を消してしまった。現在、岡崎市では旧額田地域の限られた場所に生息しているが個体数は多くない。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧 I B 類
環境省	絶滅危惧 I B 類

### 【形態】

全長 7~10cm。ギギの中では最も小さい種である。体形はやや太くて短く頭が丸くて眼が大きい。全体にずんぐりした感じがする。尻鰭の軟条数は 13~20、尾鰭の後端にわずかに切れ込みが入る。体色は黒褐色で黄褐色の斑紋がはいる。幼魚は明色斑が明瞭だが成長に伴い不明瞭になる。成熟した♂には生殖突起があるので♀との区別は容易である。

### 【分布の概要】

愛知県の三河湾に流入する豊川、矢作川と伊勢湾に流入する宮川などの河川の中流から上流域に分布する。岡崎市内では額田地域の乙川支流の限られた地区に局所的に分布し、また同一河川でも不連続的に分布している。日本固有種。

### 【生息地の環境／生態的特性】

水質の良いきれいなゆるい流れの礫底の川に生息する。大きな石の下に隠れていたり、川岸のアシなどの茂ったところに生息している。本来は夜行性であるが個体数の多いところでは昼間も泳ぐ姿を見かける事もある。そのような所では子供の雑魚釣りに簡単に釣れたり簡単に手網ですくえたりする。新城市の山あいのかつての生息地では支川にも多く、子供達がクロンタと呼んで捕まえていたものである。夜行性で夜に明かりをつけて観察すると、流れのゆるい川底近くを餌を求めてゆっくり泳ぐ姿を見ることができる。食性は動物食で底層にいる水生昆虫類を食べている。昼間、ミミズをつけた仕掛けを竹の棒につけて大きな石の下に差し込むようにすると簡単に釣りあげることができる。清流の魚であるがエアープンプなしで持ち運びでき、良く慣れアクアリウムでの飼育は容易であった (昭和 34 年当時、天然記念物に指定される前のこと)。産卵期は 6~7 月頃で石の下などに 100~500 個ほどの卵を産み、♂が卵を保護する。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

現在、岡崎市内では旧額田地域の限られた場所 (乙川支流の上中流部) に生息している。乙川の本流沿いにある須淵町の少年自然の家で行った川の生物観察会で本種が採集された事があった。比較的近い距離の上流にある支流から移動してきたものであろう。どの生息場所でも個体数は多くない。額田地区の夏山小学校では毎年夏季、学区の川の生物調査活動を実施しているが昔は多かった本種も最近では数個体 (2~4 個体) しか確認できないと言う。昭和 34 年当時、子供たちがクロンタと呼んで捕獲して遊んでいた生息地は現在、圃場整備や河川改修などの結果、本種は絶滅している。これらの絶滅、激減は昭和 30 年代より始まった水系の水質汚濁が最も大きな原因である。

除草剤などの農薬の流入、洗剤の大量使用による生活污水の流入は、山中、本宿地区の本種ばかりでなくゲンジボタルも絶滅させた。水質が回復して額田地域に残った本種も、その後広く進められた河川改修工事の影響により個体数を減らしてきている。特に大小の堰 (堰堤) によって川は寸断された構造になり、魚類の遡上を不可能にしてしまった。また、コンクリートによる護岸は本種だけでなく、多くの川の生物の生息環境を奪う結果になってしまっている。

### 【保全上の留意点】

辛うじて残った本種の増殖を計るように対策を講じなくてはならない。農薬、生活污水の流入には十分注意する必要がある。また、魚梯を設けるなどして魚類が移動しやすい河川構造に改めていくと共に、コンクリート護岸の部分には蛇かごを設けるなど、本種の生息しやすい環境を作ることも大切であろう。

### 【特記事項】

本種は昭和 32 年 (1957 年) 岡田弥一郎、窪田三郎両博士によって新種として発表され、最初はギギモドキと命名された。昭和 52 年 (1977 年) 国の天然記念物に指定された。

### 【関連文献】

川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.  
梅村錠二, 1984. 淡水魚類. 愛知の動物, pp.212-231. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(執筆者 永井 貞)

魚類 005	ダツ目 メダカ科	岡崎市 絶滅危惧Ⅱ類
<b>メダカ（ミナミメダカ） <i>Oryzias latipes</i> (Temminck et Schlegel)</b>		

### 【選定理由】

除草剤などの農薬の大量使用、オオクチバス、ブルーギル、カダヤシ等の外来魚の繁殖など、本種が減少してきた原因は様々だが、最も主要な生息場所だった常に水を張った水田が全国的に減少した事が致命的となり、激減してしまった。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

### 【形態】

体長 3～4cm。背鰭 6 軟条、尾鰭 17～19 軟条、胸鰭 14 軟条、腹鰭 7 軟条、側線はない。口ひげはない。体は淡い黄色味を帯びた灰褐色、全身橙色（ヒメダカ）や白色などの個体も多い。カダヤシに似るが尾鰭が角張り、尻鰭も広い。♂の背鰭外縁に欠刻があり、♀の尻鰭より幅が広く長い。

### 【分布の概要】

岡崎市では旧市内から額田地域まで広く分布する。県内でも全域に分布する。国内では東北から沖縄まで広く分布し、国外では朝鮮、台湾から東アジアまで分布する。

### 【生息地の環境／生態的特性】

もともと水深の浅い止水域を好むため、水田や水田周辺の溝、用水、沢、ため池に多く、河川では流れのゆるい所に生息する。水面付近に群を作って泳ぐ姿を目にする。♀は産卵後しばらくの間、卵を腹部に付けたまま泳いでいるが、やがて水草などに付着させる。食性は雑食性で、昼行性である。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

かつて市内の至る所に開かれていた水を張った水田は、今日ではほとんど消滅してしまった。農業用水路はコンクリートの U 字溝などになり、水田周辺の水路にはカダヤシが進入、ため池もオオクチバスやブルーギルが繁殖し、本種の生息環境は大変きびしいものとなっている。現在、乾田化が完全にできない丘陵地や山間の水田とその周辺の沢、外来魚の影響のない限られたため池や湿地内の水溜りなどがわずかに残された本種の生息地となっている。

意外なことだが、本種は空気呼吸（鼻あげ）ができるため、生活污水の流入で悪臭ふんぷんたる他の魚が全く生息できなくなった汚水溜まりや市街地の排水溝（ドブ）にも生息していて驚かされることがある。メダカは清流の魚と思っている人が多いようだが、これは誤りである。

いつ頃からか三河地方にもカダヤシが人の手で持ち込まれ、最近、岡崎市内でも繁殖して本種を圧迫している。連尺小学校区内の早川にもカダヤシが繁殖しているが「あの汚れた川がメダカが棲めるような川になって良かった」という声を聞くくらい、離れて見るとカダヤシとメダカはよく似ている。絶滅に瀕したメダカを増やそうとして、誤って善意でカダヤシを放流する人がいる事も本種の生息場所を狭めている。蒲郡市、西尾市、豊橋市などの海岸に近い地域にはカダヤシが大繁殖しているため、岡崎市ではなかなか姿を見る事ができなくなったメダカがこんなにもいるから帰って放流しようと思う人がいても不思議ではない。

観賞用のヒメダカに対して野生の本種はクロメダカと呼ばれ、飼育魚として人気が高い。販売目的で数少ない本種の生息地から捕獲していく心ない人がいるが、このような行為は慎むべきである。

### 【保全上の留意点】

トロ箱や庭池で飼育して本種の増殖をしている人がいるが、わずかの個体で繁殖を図るのではなく、本種の生息・繁殖に適した環境を自然状態の中で整備していく必要がある。

例えば、水田に給排水する水路には稲の栽培時だけでなく年間を通して水を確保する事が肝要である。また、人の手によって市内のあらゆる水系に繁殖してしまった外来魚の駆除についても、駆除が可能なため池や農業用水路で実施しなくてはならない。メダカと間違えて善意でカダヤシを放流してしまう人に正しい知識を理解してもらうような努力も自然を守るためには必要であろう。

### 【関連文献】

永井 貞, 1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会.  
川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.  
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版, 462pp. 保育社, 大阪.  
内田 亨 (監修), 1948. 学生版 日本動物図鑑, 501pp. 北隆館, 東京.

(執筆者 永井 貞)

魚類 006	ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>スナヤツメ <i>Lethenteron</i> spp.</b>		

**【 選定理由・現在の生息状況 】**

昭和 20 年代まで、乙川では川の砂利採取を専門にしている川船業者がいた。採取した砂利は粒の大きさによって分別されて積まれていたが、砂の中にはかなりのスナヤツメがいたのを覚えている。このスナヤツメは意外に知られていてそっと拾いに行ったものだが、こわい川船の船頭に砂山が崩れると怒鳴りつけられたものである。昭和 30 年代の著しい水質汚濁の後、本種は他の魚類と共に姿を消したかにみえた。昭和 50 年代、岡崎市史編纂のための調査で乙川上流部に残存している事が判明し今日に至っているが、個体数は多くないようである。また、かつて生息していた場所でも現在は見つかっていないようである。現在の生息環境の保全が重要である。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

**【 種の概要 】**

鰓孔 7 個は別々に体側に開口する。胸鰭、腹鰭はなく、背鰭、尾鰭、尻鰭はすべて連続する。鱗はない。顎がなく口は吸盤状。孵化後幼生（アンモシーテス幼生という）は 3 年間川底の泥中にいて藻類や有機物を取り入れる。4 年目の変態後、大きさは 14~15cm 程になる。成魚は消化管が退化して全く食物をとらず、産卵すると死んで海へ下る事はしない。カワヤツメに比べると小さく食用にはされない。眼が 8 個（実は眼でなく 7 個は鰓孔）もあることから、目の病気に効くと思われていたという。



岡崎市蓬生町, 2013 年 11 月 13 日, 永井 貞 撮影

湧水のある流れの緩やかな水質の良い砂泥底に生息する。国内では、北海道、本州、四国と宮崎、鹿児島を除く九州の川に生息し、国外では樺太、朝鮮、沿海州に分布する。

スナヤツメには北方種と南方種の 2 種が存在するが、市内での確実な記録は南方種である。

**【 関連文献 】**

- 中坊徹次（編）、2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, 2428pp. 東海大学出版会, 神奈川。  
 永井 貞, 1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会。  
 川那部浩哉・水野信彦（編）、1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京。  
 宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版, 462pp. 保育社, 大阪。  
 内田 亨（監修）、1948. 学生版 日本動物図鑑, 501pp. 北隆館, 東京。

（執筆 永井 貞）

魚類 007	コイ目 コイ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>カワヒガイ <i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i> (Temminck et Schlegel)</b>		

**【 選定理由・現在の生息状況 】**

昭和 30 年代の著しい水質汚濁以前、旧岡崎市内の乙川、矢作川、巴川では雑魚釣りに本種が釣れたという。♂の婚姻色は独特の美しさで、サクラバエとも呼ばれた。食べても美味しい魚であり珍重されたという。昭和 50 年代には、落ちアユ漁の刺し網にかかる事があったというが、大きさが 20cm ほどもある大型のピワヒガイ（アユ種苗に混じって琵琶湖から移入されたと思われる）であったようだ。水質が回復した現在も個体数は少ない。産卵床であるイシガイなどの二枚貝が著しく減少していることが最大の原因と思われる。また、河川でのオオクチバスやブルーギルの繁殖も影響を及ぼしていると考えられる。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	準絶滅危惧

**【 種の概要 】**

ヒガイ類中では最小で 13cm くらい。体色は光沢のある灰色をしていて腹面は白っぽい。体側には小さな雲状斑を形成する。背びれには 1 本の黒色帯がある。成熟した♂には追星が現れる。♂の婚姻色は顕著で、ひれは黒く眼は赤くなる。♀は短い産卵管を伸ばす。産卵期は 4~7 月で、タナゴ類と同じようにイシガイ、タガイなどの二枚貝に産卵する。

アユ漁の盛んな乙川では、琵琶湖産のアユを移入してきたため、琵琶湖産のピワヒガイ（サクラバエとも呼ばれる）が持ち込まれてきたが、最近ではサクラバエを知る人はほとんどいなくなった。

**【 関連文献 】**

- 永井 貞, 1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会。  
 川那部浩哉・水野信彦（編）、1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京。  
 宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版, 462pp. 保育社, 大阪。  
 内田 亨（監修）、1948. 学生版 日本動物図鑑, 501pp. 北隆館, 東京。

（執筆 永井 貞）

魚類 008	コイ目 ドジョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>ホトケドジョウ <i>Lefua echigonia</i> Jordan et Richardson</b>		

【選定理由・現在の生息状況】

昭和20年代まで本種は、主として冷たい湧水の出る山間部や丘陵地の水田を生息場所としてメダカ、ドジョウ、タニシとともに代表的な普通の水田の生物であった。昭和30年代に入り水田耕作に機械が導入されるようになり、急速に乾田化や圃場整備が進み常に水のある水田という生息場所を失い、水田をとりまく沢や水路、湿地のわずかな水溜り、河川の上流部やこれに流入する細流などに生息場所が限られてしまった。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧II類
環境省	絶滅危惧IB類

【種の概要】

全長6cm内、口ひげは4対うち1対は鼻孔附近にある。頭部は扁平で眼の下に棘はない。体色は赤褐色または黄褐色をしていて、小さな暗色点体が全体を密に覆っている。体色に雌雄差はないがみに比べて♀のほうが大きいようである。普通のドジョウに比べずんぐりした体形をしている。

比較的水のきれいな細流を好み、草のかげに潜み小動物を食べる。湿地など魚が棲めないと思うほどのわずかな水溜りでも見つかる。ドジョウのように驚いてもあわてて泥中に潜るようなことはしない。岡崎市では、かつてホトケドジョウという名は知られておらず、メナシドジョウなどとして知られていたが食用にはされなかった。

日本固有種で、国内では青森県、中国地方西部を除く本州、四国東部に分布する。



岡崎市八ツ木町, 2004年12月16日, 永井 貞 撮影

【関連文献】

- 永井 貞, 1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会.  
 川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.  
 宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版, 462pp. 保育社, 大阪.  
 内田 亨 (監修), 1948. 学生版 日本動物図鑑, 501pp. 北隆館, 東京.

(執筆 永井 貞)

魚類 009	コイ目 ドジョウ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>トウカイナガレホトケドジョウ <i>Lefua</i> sp.</b>		

【選定理由・現在の生息状況】

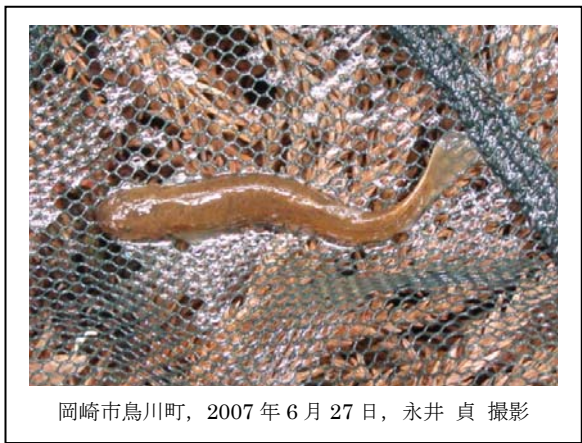
トウカイナガレホトケドジョウは、従来のナガレホトケドジョウのうち、遺伝学的に異なる東海地方に分布する集団につけられた新称である。岡崎市では、鳥川地区の河川上流部の沢や細流、源流部に近い他魚の生息しないようなわずかな水溜り状の場所で発見され、本種の分布の西限にあたる。鳥川地区以外では隣接する宮崎地区や本宮山山麓部にも生息するようだが、詳細は不明である。本種は岡崎市では山間部や丘陵地に生息しているホトケドジョウとみなされてきた魚である。詳しい事は今後の調査に待ちたいが、生息する場所も限られていて個体数も決して多いとは言えない。道路建設工事や砂防ダム建設によって生息地が減少しつつあるため、詳細な調査と保護対策の実施が望ましい。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧II類
環境省	絶滅危惧IB類

【種の概要】

学名は未定。全長6~7cm。体色は淡褐色で口ひげは8本。本種はホトケドジョウと混生している事があり、外見もよく似ているためホトケドジョウとされてきた。しかし、吻部や鰭の斑紋を詳しく観察することで見分ける事ができる。目から吻端にかけて明瞭な暗色の帯があり吻も長い。鰭には斑紋がない。標高100~500mほどの山地の溪流や沢に生息し、木々で覆い隠されてしまうような沢に好んで集まる。沢の源流部付近の、他の魚がすまないような僅かな水たまり状の場所にもいる。夜行性で水生昆虫類を食べると言うが詳しい生態は不明である。

静岡県浜名湖流入河川や愛知県東部などの東海地方に分布する。日本固有種。



岡崎市鳥川町, 2007年6月27日, 永井 貞 撮影

【関連文献】

- 中坊徹次 (編), 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, 2428pp. 東海大学出版会, 神奈川.

(執筆 永井 貞)

魚類 010	ナマズ目 アカザ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>アカザ <i>Liobagrus reinii</i> Hilgendorf</b>		

**【 選定理由・現在の生息状況 】**

昭和 30 年代に水質汚濁が著しくなる以前は、市内の大小河川に広く分布、生息していた。水のきれいな川の上～中流に生息する魚であるが、花火大会の行われる殿橋付近でも瀬のあるところには生息していた。当時この付近はヤリタナゴがよく釣れる所として知られていたが、その雑魚釣りにも本種が釣れたものである。農村地帯を流れる山綱川、鉢地川、青木川などでも良く釣れた。水質の汚濁には弱く、昭和 30 年代に河川中流部では絶滅した。上流部にはかろうじて残存したが、以後急速に進められた河川改修による棲み場所や餌となる水生昆虫などの減少、更に農薬類の流入などが複雑に影響して個体数が減少した。現在、市内の生息地はほとんど額田地区の河川であるが、ここでも個体数は減少傾向である。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	絶滅危惧Ⅱ類

**【 種の概要 】**

本種はあまり大型化することはなく、全長 10cm 位である。体色は赤みを帯びるが地域変異が大きい。胸鰭と背びれには各 1 本の刺棘がある。刺棘には毒腺があり、知らずに握って刺されるとかなり痛い。岡崎市では、アカサス、ハリメコの俗称で知られていた。背びれの後部には脂鰭がある。尾鰭の後縁は丸く扇形になる。口ひげは 4 対 8 本ある。産卵期は 5～6 月、瀬の石の下に産み着ける。卵は♀が守るといふ。

夜行性だが昼間も結構活動している。日本固有種で、秋田県、宮城県以南の本州、四国、九州に分布する。



岡崎市上衣文町，2009 年 10 月 25 日，永井 貞 撮影

**【 関連文献 】**

永井 貞，1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会.  
川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.  
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版, 462pp. 保育社, 大阪.

(執筆 永井 貞)

魚類 011	スズキ目 ドンコ科	岡崎市 準絶滅危惧
<b>ドンコ <i>Odontobutis obscura</i> (Temminck et Schlegel)</b>		

**【 選定理由・現在の生息状況 】**

昭和 30 年代に水質汚濁が著しくなる以前は、矢作川、乙川、巴川からそれぞれの支流に至るまでほぼ市内全域に生息していた。瀬ではなく淵を好んで生息し、乙川の名鉄本線乙川鉄橋付近の淵でミミズを餌に釣ったものだった。この当時、乙川は全域に瀬と淵があり、矢作川合流点まで水質は良く、淵の部分の底にはヘドロの堆積は全く無く、棒杭や石組にも今日のように藍藻類の付着もなく、本種の生息場所は多かった。本種はオイカワやフナのように群で生活する魚ではないので食用にするほど捕れなかったのは今日も同じである。現在、川の水質は改善されて本種も生息ができるようになったが、河川改修により本種が生息できる淵が極端に減ってしまった。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	リスト外

**【 種の概要 】**

体はずんぐりしている。頭部は縦扁し尾部は側扁する。体色は暗色で第 1 背びれ第 2 背びれの基底から黒色斑がある。背面から見ると体の中ほどに黒色菱形模様が見える。産卵期、♂は全体が黒色となり頬や額が膨らんで特異な顔つきになる。俗称カワフグはここからきている。夜行性であるが昼間でも姿を見せ釣れる事がある。大型の水生昆虫、甲殻類、魚などを食べる。貪欲で、捕えた魚を本種と一緒にバケツに入れておくとバケツの中で他魚を呑みこんでしまうくらいである。飼育するとよく慣れて人の手から餌を取ったり指にじゃれたりする。

矢作川、巴川、乙川上流、支流の一部に生息するが個体数は多くない。立川は比較的個体数が多く、巴川には大型の個体が多く見られる。



岡崎市池金町，2013 年 11 月 2 日，永井 貞 撮影

**【 関連文献 】**

永井 貞，1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会.  
川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.

(執筆 永井 貞)



魚類 012	ウナギ目 ウナギ科	岡崎市 情報不足
<b>ニホンウナギ <i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel</b>		

**【 選定理由・現在の生息状況 】**

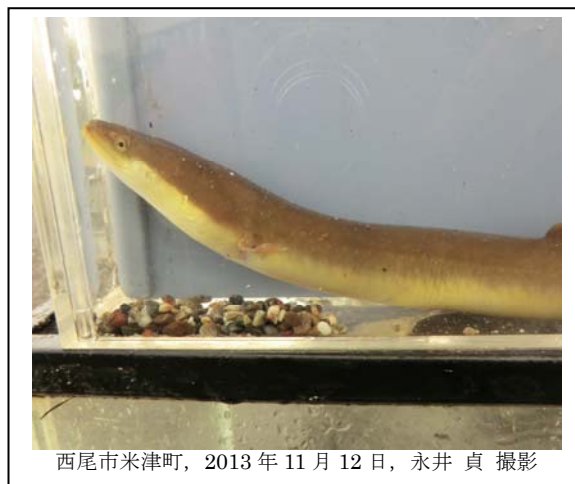
昭和20年代まで本種は、市内のあらゆる水系のすみずみまで行き渡り最も身近な食用魚であった。その後の昭和30年代以降、急激な高度経済成長に伴う水質汚濁、農薬化成肥料の大量使用、河川改修や重要な生息場所であった水田の乾田化などが相乗的に働き、本種の生息環境は著しく悪化している。本種は人工養殖されているが、これは天然に遡上する幼魚を捕獲して人工育成するものであり、現在、人工的に産卵させて幼魚に育てる技術はない。最近では天然に遡上する幼魚（シラスウナギ）が激減している。また、ダムや大小の堰堤がシラスウナギの遡上を阻害しているため、これを改める必要がある。

県・国の評価区分	
愛知県	リスト外
環境省	絶滅危惧 I B類

**【 種の概要 】**

産卵場はマリアナ諸島西部海域であるとされ、孵化した仔魚は黒潮に乗って日本列島までやってくる。仔魚は黒潮に乗りやすい形をしており、葉形幼生レプトケファルスと呼ばれている。これが日本近海でシラスウナギになり、さらに体色が黒ずんでウナギになる。日本にはウナギとオオウナギがいる。ウナギの血清には毒があるため生食はしない。

本種は北海道以南の日本各地に分布、国外では朝鮮、中国大陸、台湾に分布する。最近ではアメリカウナギやヨーロッパウナギも輸入されている。日本ではウナギは河川の全域、これと繋がる湖沼、水田などあらゆる水環境に生息場所を見つけて定着する。そこで10年近く留まり成熟すると海へ下る。夜行性で魚類、甲殻類、貝類、水生昆虫類からカエルなどを食べる。



西尾市米津町, 2013年11月12日, 永井 貞 撮影

**【 関連文献 】**

永井 貞, 1985. 岡崎市の魚類. 新編岡崎市史 自然 14, pp.738-790. 新編岡崎市史編さん委員会.  
川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.  
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版, 462pp. 保育社, 大阪.

(執筆者 永井 貞)

魚類 013	コイ目 ドジョウ科	岡崎市 情報不足
<b>トウカイコガタスジシマドジョウ <i>Cobitis minamorii tokaiensis</i> Nakajima</b>		

**【 選定理由・現在の生息状況 】**

本種は市内では青木川と真福寺川の合流点付近のごく限られた場所ですしか生息が確認されていない。青木川も全域でなく真福寺川合流地点より上流1kmほどの間で捕獲確認できただけである。市内の他の水系からはこれまでのところ確認されていない。本種の捕獲場所は、青木川本流の水量の少ない流れのゆるい砂底の場所であった。なぜ、青木川のごく限られた範囲にだけ本種が生息するかは不明である。ここに生息する本種の個体数も多くない。しかし、本市に接する西尾市東部の須美川には本種が多く生息している。個体数も多く、手網による採集ではほとんどすべてが本種である。

最近、青木川の本種の生息場所に魚梯が設置された。これは魚の移動、特に遡上には無くてはならない施設であるが、同時に合流点の真福寺川では大規模な護岸工事が行われた。また、この付近に住宅地からの排水溝が流入している。これらが本種の生息にマイナス要因とならないように注意すべきである。

県・国の評価区分	
愛知県	準絶滅危惧
環境省	絶滅危惧 I B類

**【 種の概要 】**

スジシマドジョウは大型と小型に分けられている。これまで本種は東海地方に生息しているスジシマドジョウの小型種という意味で「スジシマドジョウ小型種東海型」とされてきたが、最近になってトウカイコガタスジシマドジョウという新亜種名で記載された。

全長5~7cm。体色は肌色の地に体側に黒い太いラインが2本、背中には黒っぽい斑点のような模様がある。腹側は白い。口ひげは6本。シマドジョウとよく似ているが、本種はシマドジョウよりずっと細く小さい。

**【 関連文献 】**

中坊徹次 (編), 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, 2428pp. 東海大学出版会, 神奈川.  
川那部浩哉・水野信彦 (編), 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類, 719pp. 山と溪谷社, 東京.

(執筆者 永井 貞)

カジカ大卵型 *Cottus pollux* Günther

## 【 選定理由・現在の生息状況 】

本種は旧岡崎市域では記録がない。岡崎市に合併した額田地区の千万町地区の山間の細流で捕獲されたのみである。ごく限られた範囲であるが、数個体を捕獲することができた。本種が捕獲された場所は、水深 10cm 以下で川底には大小の礫が多く、冷たく澄んだ沢水が流れる細流（沢）であった。本種以外には、ヨシノボリ類が僅かに生息するのみであった。この細流が流入する下流の河川では、まだ本種は見つかっていない。本種の生息が確認されたのは、礫の間にカワゲラやカゲロウなどの水生昆虫が多い細流の延長 100m にも満たない範囲である。この細流には降雨による濁水の流入のほか、周辺施設からの残飯類の混入も心配される。市内で唯一の本種の生息地を大切に保護していきたいものである。

県・国の評価区分	
愛知県	絶滅危惧Ⅱ類
環境省	準絶滅危惧

## 【 種の概要 】

体色は淡褐色から暗褐色まで変異に富み、体側には 4～5 個の暗色の斑紋がある。えらぶたの後縁の棘は 1 本。胸鰭の軟条は分岐することなく、腹鰭は淡色斑紋がない。

カジカは生活型から一般に 2 つの型に分類されている。一生を淡水で過ごす河川陸封型が大卵型、孵化した稚魚が海で過ごし成魚となって川を遡上する両側回遊型が小卵型とされている（中卵型を含めて 3 型とする説もある）。2 つの型は形態的にきわめて酷似するが、胸びれの軟条数、尾柄の太さの違いなどで区別できる。大卵型は山地の溪流に生息、小卵型は河川の中下流に生息し、いずれも石礫の多い川底を好む。肉食性で水生昆虫類や小魚などを食べる。産卵期は 11～4 月、河床の石に卵を産み付ける。

日本固有種で宮崎、大分、東海、近畿、本州の日本海側、四国の太平洋側に分布する。本種は大変に美味であると言う。



岡崎市千万町町，2006 年 11 月 17 日，永井 貞 撮影

## 【 関連文献 】

中坊徹次（編），2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版，2428pp. 東海大学出版会，神奈川。  
川那部浩哉・水野信彦（編），1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚類，719pp. 山と溪谷社，東京。  
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦，1976. 原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版，462pp. 保育社，大阪。

（執筆者 永井 貞）